

名誉館長館話実施報告抄(2)

新野直吉*

平福百穂 和田喜八郎 石川理紀之助 物部長穂 井口阿くり 斎藤佳三

はじめに

平成13年度は、前年度に続き、「先覚記念室」「菅江真澄資料センター」に因み12回行った。

中から6月8日(金)平福百穂・6月22日(金)和田喜八郎・7月6日(金)石川理紀之助・7月20日(金)物部長穂・8月3日(金)井口阿くり・8月17日(金)斎藤佳三の各回について、「館話」内容を文章化して報告するものである。

平福 百穂

明治10年(1877)12月28日角館町横町に、順蔵(穂庵)せつの四男として生まれる。貞蔵と名づけられ、同15年中街学校小学初等科に入学、19年角館学校小学高等科に進級する。この年父穂庵は東京に出て向島佐竹別邸に住み、下谷西黒門町に移って塾を営むようになる。21年上京の寺崎広業も塾生となった。19年に「韓世忠」という南宋の武将の絵で第三回絵画供進会一等賞になるなど、既に得ていた名声に更に箔を付けたが健康を損ねて22年帰郷する。23年高等科卒業の貞蔵は父から椿・梅などの手本を与えられて、絵の稽古を始めた。10月秋田でその父が倒れ、12月11日那波別邸で死去した。47歳だった。彼は父と師とを失った。

だが今風に言えば彼のDNAは常人と違っていた。父順蔵は名前を芸といたが、10歳にして四条派の武村文海を師として文池なる画号を貰っていたし、祖父平福太治右衛門も文浪の号を持つ染物師・絵師であった。文池はやがて穂庵を号とするが十代で上洛し幕末騒乱の京都で画業に励んだ。母親が心配したので父文浪が迎えに行ったが、自分も京洛の画景を楽しみ3年も戻らなかった。父子で北陸経由帰郷したのは明治元年だという。穂庵は戊辰ノ役で出動していた大村藩・平戸藩などの西南軍が角館にもいたので、地図などを描いて

助力したという。明治5年(1872)函館滞在などで北海道の風物人事にも画題を拡げ、帰県して荒川鉦山に勤め瀬川安五郎の知遇を得た。こうした父祖を持つ貞蔵は父死去の翌24年7月穂庵追福の秋田絵画品評会が催されると自分の絵も出展した。父の画友鈴木百年も来会して少年の画才を高く評価した。藩校以来の漢学者教育家西宮藤長(瑞齋)が百年の百と父の穂を採り百穂と命名した。

明治26年(1893)12月後援者盛岡の瀬川安五郎邸へ入り、翌年頭に上京し父と交友関係にあった川端玉章の内弟子となった。5月長兄恒蔵24歳を失ったが秋の日本美術協会展の「義貞拳義兵」で二等賞となった。通い塾生で親友の結城素明の勧めで30年東京美術学校日本画科選科に20歳で入学した。それは師意に背いた入学だったので翌年塾を出て下谷に下宿する。32年7月美術学校卒業制作で「田舎の嫁入」を描いた。この画題は明治24年15歳でも扱っていた。赤い着物で馬に乗った花嫁一行のこの紙本の絵は小田急美術館蔵という。

石井柏亭の「百穂の業蹟を回顧す」という評文の冒頭卒業制作について「二十三歳の若描き『田舎の嫁入』を見ると、この秀好な画人にも、斯かる稚気満々の作があったかと人を微笑ましめる。日傘をさして馬に跨って来る花嫁、それに付添う人達、茶店に集ってこれを見ている人達にはユーモアが見えるが描線には、ある俗臭さえある。ただ背景の樹木に多少清新な趣がほの見える」(平成13年5月刊・ギャラリーぐんじ『百穂』)と述べる。明治24年の作とは図柄は違うのであろう。少年時の作は日傘ではなく頭上の笠である。

親友結城素明は昭和8年2月「平福君の芸術は、写実の精神を以って、我々が天声会を起こして、当時の理想主義を標榜して、日本の美術会に打って出た、あの頃の、あの燃えるような精神を以っ

*秋田県立博物館

て今日に至るまで、終始一貫したものである。…
…写実に終始した君の画風は、先天的に、先考穂
庵翁からの思想を受け継いだものである。父は四
条風から写実に向っての運動をやった。……子供
のときから腹の中から、自然の真実を見る筆、物
を見たときに、写実にこれを把握する力が、天才
的に閃いたものと思う」（同上誌所収「塔影よ
り」）と書いた。正に角館画人のDNAである。

素明は続けて「文展第三回の『アイヌ』と、帝
展第三回の『刈草』とを互いに比較して見ても、
時間的には、二十年もの隔たりがあるが、思想的
には、少しも変わっていない。それも一貫した熟達
ではある」と記しているが、川合玉堂も同誌所収
の「一貫した平福氏の持味」という文で「始めて
見た『アイヌ』の一作、あれは当時私共の頭にしみ
込んで、以来、今に至っても忘れられない佳作
である。すなわち平福君の芸術は、この『アイヌ
』で画壇の人々に印象づけたのであった。『アイ
ヌ』のあの淡々とした画風、黒色基調、淡彩で描
きあげた筆さばきの伸び伸びさ。驚くべきものだ
」と讃え、僅か一年位椅子を並べた美校生活で、
親交はなかったと述べ乍ら「故人がその名の如く
平和で福々しい風貌に接して親しみを覚えた」と
いっている。歌での写実も画人としてのそれと通
じていた訳である。心は福々しい丈ではなかった
らしい。小岩千秋の「最後の内弟子の一人として
」は「先生好き嫌いのはっきりした人」と記す。
卒業後帰郷して角館にいた彼は、10月日本絵画
協会第七回共進会に「送別」を送り三等褒状とな
る。この協会は朦朧派の天心・大観・観山・春草
ら洋画要素を入れた新傾向とは異って、洋画デッ
サンを受容しながらも日本画伝統の線描を重視し
ていた。翌33年3月結城素明・大森敬堂ら川端5
門下が「天声会」という自然主義を標榜する画会
を結成、彼も同調し第一回展に「鮭漁」などの作
品を出した。5月角館大火で家や父の遺品を焼失
したが、9月の二回展にも「里祭」などを出品。

明治34年(1901)1月横手町嶋崎町に本籍を移し
4月再上京する。素明と33年百穂のすすめで上京
していた田口掬汀などが誘ったのである。向島弘
禪寺境内素明宅に寄寓した。素明は兵役だったと
いう。新潮社前身の新声社において雑誌「新声」

の表紙・挿絵・カットなどを描いた。諸新聞にも
絵を描き杉村楚人冠・高島米峰ら新仏教同人とも
出会い交際範囲を拡げる。翌35年には1月起きた
八甲田山遭難の写生に素明や敬堂らと出向き、5
月函館での穂庵追弔会に赴いたが、この年に最も
重要な出来事は、素明の紹介で6月伊藤左千夫・
長塚節らと知り合ったことである。7月には東京
美術学校西洋画科選科に入りデッサンを学ぶこと
になるが、左千夫らの縁で8月逝去前月の正岡子
規を訪問することになった。画期的出来事である。

子規は俳句で名高いが和歌でも「古今集」を否
定し「貫之は下手な歌よみにて」といい「万葉集
」を評価する立場でアララギ派の先達であり、同
派歌人としても名を成す百穂にとって千載の一遇
の機を得たことになる。勿論子規は叙事文で漱石
にも影響を与えたような文学界の巨星であるか
ら、明治39年にアララギ門に属した斎藤茂吉など
にとってもこれは羨望の事実であったに違いない。

前年新声社を退社したが36年(1903)電報新聞社
に入社同勤の窪田空穂を知った。38年1月末黒溝
台で三兄健蔵が戦死する悲しみがあったが新聞・
雑誌の仕事が多々で、秋には柳田国男を知ること
になる。斎藤茂吉や後年原阿佐緒との恋で名を知
られる物理学の石原純などを知り、8月富士に初
登山をする。この登山で初めて歌を詠んだといわ
れている。彼の人脈が秋田の文化に齎したものは
甚大である。40年(1907)には国民新聞社に勤務、
議会挿絵の掲載で人気を博した。

明治41年(1908)数え年32歳で10月同郷貞亮の妹
安藤ハル22歳と結婚し、青山北町に新居を営んだ。
42年11月妻は余りの貧乏にあきれて帰郷してしま
う。43年1月長男一郎が誕生したあと3月に離婚
することになる。大正2年5月鷹野ますと結婚し
また家庭を形成する。3年第八回文展三等の「七
面鳥」は漱石の絶賛で名声を得た。10月長女やす
が、5年3月には次女とくが誕生する。

大正7年(1918)1月三女とみが誕生したが、こ
の年虫垂炎を病んだという。9年の9月には次男
周蔵が誕生する。またこの頃郷里角館で田口掬汀・
黑板勝美と講演をした。掬汀は既に述べたよう
に同郷の友で本名鏡次郎である。明治33年上京し
て新声社に入社作者生活。36年に万朝報に移り38

年の「伯爵夫人」などが代表作で、43年川上音二郎の大阪帝国座の座付作者になった。大正7年には百穂と帝国美術館建設運動に奔走した仲でもあり、次男の洋画家省吾その長男の作家高井有一などがおり角館と縁が深い。黒板博士は長崎県出身明治38年学位を得、前の年に東大教授に昇任した著名国史学者である。特に角館に縁があったとは思えない。その訪角講演には百穂と掬汀の存在と働きかけがあったことは疑いない。

11年4月長男は芝中学に入学、8月には三男三吉誕生。百穂は角館中学校創設に尽力していた。そしてこの角中の創立は四女恵子も誕生する14年で彼は校歌について島木赤彦に依頼する。アララギの赤彦は長野県人であるが彼と親しかったのであろう。彼自身は校章・校旗図案制作に努める。なおこの年5月朝鮮美術展審査に赴き、兄健三戦死の戦跡を訪ね満州黒溝台にも脚をのばした。

大正15年には帝展審査員になる。自ら「荒磯」を出品群青と金の描き出す雄大壮麗さが話題となった。翌昭和2年(1927)正月世田谷で新居が落成し、春長男は一高に進学し、6月五女茂子が誕生した。なおこの年生まれた斎藤茂吉次男に名づけ親として「宗吉」と命名。後年の北杜夫である。彼と斎藤家の間柄がわかる。翌3年末には母が逝去したが、4年には帝国美術学校が創立され彼は教授になった。第一回秋田美術展に出品、8月堅田に写生し、9月横手で作画をし、審査員になった第十回帝展に有名になる「堅田の一休」を出品した。だが最も注目すべき事は『日本洋画曙光』を纏め翌5年(1930)2月岩波からの刊行である。

5年にはローマで開催の日本美術展の委員用務と在外研究の為に1月出張を命ぜられ、4月ナポリに着いた。西欧諸国を周遊し、11月岡田三郎助とパリ発ベルリン・シベリア経由で帰国。6年数え年55歳で近衛文麿の依頼で「牡丹・竹に雀」を描き、次兄善蔵を大阪から呼び自宅で静養させた。翌7年には1月に東京美術学校教授となった。角館の小学校・中学校でも講演をした。

昭和8年(1933)1月アララギの二十五周年祝賀会に出席、明治45年以来歌誌「アララギ」の表紙を書いて来た立場でアララギの歩みの証言者として「苦境時代のアララギ」を同誌記念号に執筆。

10月帝展審査員になるが体調で欠席。23日兄善蔵の訃報で横手に夜行で出向き翌朝着き午前11時半脳溢血を発病し、30日午後9時58分逝去した。享年57歳。11月6日葬儀が青山斎場で行われ、多摩墓地に眠る。角館の学法寺にも分骨埋葬されたが愛郷心深い文人画伯に相応しいことである。

自衛隊総合病院長を務めた長男一郎は「父百穂のことども」で、角館の素封家武村家出の内気で気立ての優しい控え目な人であった母ハルが、病身だったので、自分の生後離婚になったのも「仕方ないこと」と受け止め、上目黒の自宅の画室に東条大将秘書官になる赤松大佐も歩兵一聯隊旗手の少尉の頃よく遊びに来て、父が在宅の時は「色のついた洋酒」をすすめられていたと述懐している。大正8年に世田谷三宿に白田舎という塾を作り画室を新築し、土俵があり塾生と相撲をとったりしたこと、昭和2年(1927)には住居もそこに新築し一家が移り住んだことを記し「家は一見整った門構えで、千坪もある広大な屋敷であったが、借地であり、建物がしっかりしているだけで特に贅を尽くしたわけではなかった。しかし従来借家に比べれば立派なわけだから一般から見れば豪壮に見えたかも知れない」と書いている。

さらに、一高の寮生活で空腹時とか金の必要な時とかしか帰宅しなかったが、昭和初期の銀行の取り付け騒ぎなどを見て、「このような大家族をいつまで続けて養えるのか」などと考えたこともあると述べ、「日本画の先行きの不確実さ、不安さー日本画の将来性への漠然たる不安ーそれは生活、この大家族をいかに父一人で背負い切れるかということ……などを思い合わせて漠然とした不安があったものと、今ではこのような父に哀れさを覚える」とも書いている。この文は「父の真情は常に次の如くであった。『画を売るのは止むを得ない実生活の手段であって、本当の画というのは自分の気に入った出来栄えの作品を、気に入った友人にのみ贈るものである』」と結ばれている。先の小岩千秋の文に「気に入らぬ客だと、普段タバコを吸わない先生が、そっぽを向いて苦虫をかみつぶした顔、好きだという人はニコニコして歓待した」とあるのと併せ考えると、百穂画伯の本性が浮び上がってくるようである。

和田 喜八郎

明治5年(1872)6月7日秋田郡鷹巣村に、清蔵シノの独り子として生まれる。祖父和田喜三郎は綴子村小笠原家長女シノを養女にし、彼女が15歳の時に、和田清左衛門の子清蔵を婿に迎えたのであった。明治9年祖父が没し、3年後の12年3月に33歳で父も死去した。この年に彼は小学校に入学したものと考えられるが、母シノの老いた養母と小児をかかえ家計を営む苦労は並大抵ではなかった。朝は縄をない、昼は勿論田圃に出て重労働をし、夜は縫物の賃仕事をして働いた。少年の心に母の勤労は強く響き深く刻まれることになる。

卒業後北秋田郡役所の給仕になったのも、母を助けたかったからであろう。郡役所書記をつとめた渡辺時治は、和田給仕は特に優秀であったと、褒めていたという(中嶋修三著『和田喜八郎—その生涯と教育実践』平成10年)。先輩達はその才能を評価し将来に嘱目したのである。長身で上を向いて歩く癖があったので「天井」というニックネームがついていたというが、自らも自分を奮立たせて堂々胸を張っていたのであろう。

豊かな才能を評価されてであろう。明治17年頃に鷹巣学校の臨時教員を勤めたらしい。評価は定着し、明治22年(1889)2月北秋田郡長推薦の一種選衛生となり、4月秋田尋常師範学校に入学することになった。一種生は無試験入学で、二種生は入学試験を必要とする制度であった。一種生は現に教員勤務をしていた者の中から将来性のある者が選考されたもののようである。明治5年(1872)初めて東京に設立された師範学校は仏蘭西に範を取ったものであったが、次の年に大阪・宮城、更にその次の年広島・長崎・新潟に(東京には女子師範学校が)置かれるなど、米国式教育法も取り入れ、教師養成機関を他府県にも設けて、次第に府県立師範学校に整備されて行く。

和田が入る4年前明治19年(1886)から、有名な森有礼文相が主導した師範学校令により、尋常師範学校と称されるようになった(東京に一校高等師範学校があった)。順良・信愛・威重の3気質の養成が目標で、厳しい寄宿舎生活で兵式体操も課されていた。帰省は夏休みだけであったという。官費で授業料などは無かった。裕福ではないが、

品性厳格高潔であった彼は、環境と個性を合致させて教師教育を身につけて行った。中嶋編著の『和田喜八郎』によれば、特に得意の学科は「教育原理」で、長身で最右翼に整列する身の上なのに、兵式体操は不得意であったという。『感想録』には「教練は下手で何時も叱られたため、兵式の時間は戦々兢々の思いであった」とあるという。

こうした師範生活の中で明治24年(1891)には特記すべき事件が起こった。生徒達の同盟教師排斥と学校側の退学処分である。伝えられる資料によれば、明治24年新しい寄宿舎が建築され「紀元節」の2月11日を期して、施設完備の新寄宿舎落成祝賀行事を催そうとしたが、学校側は許可しなかった。新寄宿舎に移った2月10日一部生徒は祝賀の式を行った。新聞が報道したこともあって、学校側は首謀者発見のために厳しい追求を始め、反発した生徒側は教員排斥などの挙に出た。時の鈴木県知事に直訴することになり、知事応接室に入る代表団のメンバーの中に和田も選ばれた。紛糾を重ねるうちに、学校側の停学処分なども行われたため、生徒は全員寄宿舎を脱出する行動をとった。遂に学校側は47人を放校処分とした。和田もその中に入った。「改悛の情」を認めるのが教育訓育の常道である。6月18日に38名は復学を仮に許され、やがて正式に許可された。勿論和田もその中に含まれた。「母校の歴史に最初の悪例を作った」ことを彼は長く慚愧していた(感想録)という経緯になる。数え年20歳の経験である。

いよいよ明治26年(1893)3月25日師範学校を卒業する。卒業後郷里の鷹巣小学校に赴任することになっていたが、31日に奥田師範学校長に呼ばれ附属小学校に勤務するように誘引された。だが母想いの彼は鷹巣に帰郷したい気持が強かったのであろう。母と相談をし承諾した。4月30日附小訓導に発令される。子供の将来を考えた母が秋田市に出ることも厭わなかったのであろう。西根小屋町上町に居住した。秋田師範で4年後輩、東京高師では3年間在学期間を共にした真田幸憲の文章に「堂々たる躯幹の持主たる青年教員が、近眼鏡を光らせながら、例の首を振りつつ颯爽として大道や校庭を通るのが目についた。しかも、其人は

新卒業生の和田訓導だといふ」(噫 和田君)なる新入学当初の師範生の見聞記事がある。察するにこの堂々颯爽は新任時に限らぬ彼の風貌なのであろう。

この颯爽教師も受難する事件があった。翌年10月19日宿直を終え、引継ぐべき教員を待ちつつ帰る準備中、県知事来校の報で玄関に出ると、時の平山知事が怒気満面立って居り、応接室に案内してからも「この寒天に自分の子供を何のために留置したか」という詰問だったという。実は知事の子供が女子教生の指導に従わないので、教生が指導教官の担任訓導にも連絡せず残留させたのであったが、宿直の彼はその教室のことは知らないで、「後程調べて報告する」という彼に知事は一層興奮激怒「文部大臣に報告する」「子供は退学させる」と息巻く。しかし彼は泰然と「退学はご都合次第だが、自分は何も申し上げかねるので校長にその手続を」と答えた。早速附属主事に報告したが、翌日校長は知事に呼び出され「和田を転任させよ」という。校長は彼に何の落度もないことを説明し、そのままとなったが、新聞に「東北某知事の職権濫用」の趣旨で報道されたので、受難の彼は同情を得たという。興味ある挿話である。

彼の同級で綴子出身の高橋本吉(後年衆議院議員となる。号は望東)は平山知事事件の半年後28年春に高等師範学校理科に進学し、他に国漢専修科に入った級友もいた。刺戟を受けるまでもなく真摯な和田が高師進学を志すのは必然だった。29年4月退職して合格した高等師範学校文科に進学した。受験希望を母親に語ると、母は「自分のことは心配いらぬ。只学費については郷里の成田儀八郎に頼むように」と言った。母の愛と当時の地方名族の育英精神とが胸に伝わる。儀八郎は第一回秋田県会議長成田直衛の弟である。

上京すると校内での学習は論理学を好んだというが、校外でも狩野亨吉に講演させた明治30年2月下旬の秋田青年会発会のような活動をした。会長は秋田出身の在京長老学者根本通明であるから、上京2年目でこの幹事役をした和田の積極性と指導性とはよく理解できる。当然綴子小学校で校長役の首席訓導であった内藤湖南については、湖南

と級友高橋本吉との関係から、彼自身臨時職員であった時期の湖南校長役勤務のことから、きっと在京中親しくしたものと推定できる。折角真面目に読書法を話したのに、通明が「貴様は誰だ」「狩野良知の二男亨吉です」「なるほど、今の話振りを聞くと貴様の親父によく似ていて、学問の仕損いだということがよくわかる」「この野郎は狩野の子供だが、こいつが言う目録などというものはとても役に立つもんでね」などという物言いをして、狩野の日記に「傲慢不遜虚実を取雑ぜ人を人とも思はざる無礼の限」と書かしめ、またこんなことがあれば、只では置かないと怒らせた(青江舜二郎『狩野亨吉の生涯』)時、話を頼んだ和田の心中は如何ばかりだったかと思われる。

明治31年(1898)27歳を数える和田は土崎小学校勤務の秋田市庄司貞と結婚した。貞すなわち貞子は東海林太郎夫人となった庄司久子の姉である。33年3月高等師範学校を卒業し、4月母校秋田師範教諭となり、附属小学校主事を兼ねた。12月に「秋田地理唱歌」を作詞し秋田の人に戻ったが、教会の神父に仏語を学んだ。高師時代に身につけたキリスト教への関心とも関係するが、教育界の独乙に偏した傾向への批判も秘めていたという。

高師に学んで開かれた心は、そのまま秋田に引きこもってはおられなかったのであろう。明治36年(1903)4月休職して東京高等師範学校研究科に入学した。32歳を数えた。暁星中学の夜学で仏蘭西語を学んでいたという。ところが6月になると清国の成都高等学堂に教授に赴くのである。仏蘭西遊学を志して仏語を学んでいたのに不思議であるが、第一高等学校長狩野亨吉から「清国四川省から成都の高等学堂の教師を求めているから、3~4年も辛抱すれば外遊の準備もできるだろう」といわれたので従ったのであった。

ここで彼を怒らせるようなことがあった。というのは同時に成都武備学堂に招かれて行く太田陸軍曹長という人があり、彼は現職のままで任地までの俸給を支給されるというのに、高師ではまだ義務年限が2年残っているのに、その学費を弁償せよという。さらに渡清するとなれば退職になるという文部省の見解であった。「同じ国家の官職にあるものが、其所属によって待遇上に甚しき差

別がある」と彼を憤らせたのであった。

在清4年で明治40年(1907)7月帰朝した。新井奥邃に心酔し、奥邃塾に仮寓して学ぶのである。偶然のようであるが、ここは秋田出身で師範を明治28年に卒業した大山幸太郎が、明治34年に上京して学習した塾である。仙台藩出身で戊辰ノ役で敵対したとはいえキリスト者の東北人新井は、彼の「大和」とか「謙」とかの倫理論で、秋田の青年と心情通ずるものがあったのかもしれない。

明治41年(1908)5月愛知県第一師範学校教諭兼舎監として5年振りで師範教育の精英者は在るべき座標に戻る。中島氏の編著には、赴任の挨拶を聞いた生徒が、「僕の姓の和田は中国ではホーテンと発音」といったのでニックネームがホーテンになったこと、ハイカラなモーニングコートをしばしば着用し、純白な雪で化粧されたといいたような白い肌、かなり上背があり立派な風格、立派な口髭で廊下を颯爽と歩いていたなどと「思い出」に綴り、論理学・心理学などを斬新に、該博な知識で講義したことを記し、大正元年彼が教頭時に入学した生徒は、「白せきにして長身……どこか超凡の趣があって、他の教諭先生達とはまるで人種が違っているかのよう」と記し、1年程経ってから赴任の千葉命吉も、亦超凡英邁で他の凡庸な教諭先生とはまるで違っており弟の如くだったとして、信淵・篤胤・昌益の秋田輩出にまで連想を及ぼした「先生をおもう」文を綴っている。前者は東京高師の后者は神戸大学の先生の経歴がある人なので評価は確かなことと考えられる。

大正3年2月3日数えて43歳で新設の函館師範学校初代校長に転任した。開拓精神に富み自主独立の人間を育てる校風を樹立し、「北海道室」を設け、寒稽古には徹夜で一番に道場に出て生徒を待った。附属小を創設した5年に李岱小の達子勝蔵・平沢小の池田忠男を訓導に招いた。秋田県教育の力で劣っていた国語・算術などの充実策をとったのである。第一回生68名を7年3月に出すが、翌年12月15日沖縄師範学校校長に転勤となる。転任に当たり教職員生徒全員列席の函館師範講堂で、声涙共に下る辞で、函師のあらゆるものとの間に「俺が沖縄に行かねばならぬ理由はあるか！」と熱誠を示し、満座が涙したという。函館の骨董屋

に中国仏像が売られていたが、それは気に入っていたのに母の意に合わなかったので手放されたものだという。孝心を表徴する話題である。

一旦沖縄に赴任するや、徹底した熱意で師範経営に当たった。食堂を改善し、自習室を椅子・テーブル式にし寄宿舎を改善し、井戸水使用から首里城の水を引く水道式に改め、その経費は本科二年で本土に約1月赴く修学旅行を1年延ばしその金900円で賄ったという。大ストライキ後の赴任だったので山原一周6日間徒歩旅行で学校の一体感を醸成しての改革だった。英語教育も本格化させたという。離任直前に腸チフスに罹る難も克服し、10年5月宮城県第一高等女学校長に転じた。

教え子達は同じ東北仙台への赴任は郷里からの切なる招聘と理解したらしい。50歳を数えていた故か、「改善の効を急ぎ」過ぎるとの評も、大城下町名門校同窓関係者間にはあったようで、良妻賢母主義から有徳有能主義への改革や、17名の職員を3年で移動した人事刷新に反発も生じた。

大正13年(1924)7月16日秋田県師範学校校長に着任した。実に21年目の母校帰任である。第一次大戦後の「下剋上の誤った思想が強く校内を支配し」などといわれる当時、10年・13年の同盟休校もあった後、職員の統一和合・生徒の自重向上心・師弟間の情誼を掲げ経営に当たり、不祥事件も起こらず、昭和2年(1927)3月には県教育会長に就任したが、12月9日未明一部を除き校舎が焼失し会長を辞任、善後策を講じているところに、3年2月9日夜再度火災残余の舎屋も烏有に帰した。怪火といわれ校地も手形から保戸野に移され、5年1月8日鉄筋コンクリート新校舎が落成した。田中隆三文相の時というが、教育者羨望の的といわれる督学官に推されたが東京住いを厭う老母を思い受けなかった。教育会長には4年再選された。

数え59歳の5年(1930)5月福德生命の第四回海外視察員として南洋に出張し比・蘭印・新・香・上海などを視察7月帰校したが9月下旬から異状を感じ10月18日～12月6日欠勤療養した。6年9月東高師理科生年代孝次郎が校長の書翰を狩野亨吉博士に持参した訪問談を年代教授から聞いたことがある。年代氏は和田校長三女ミヨの夫になる人である。7年(1932)3月和田校長は退職し、5

月師範講堂で還暦祝賀会が開かれ、8年5月には県教育互助会長になり、教育会では学校購買相談部設置を提案する。9年3月には將軍野中学校の元校舎に、土崎尋常高等小学校南棟から遷った土崎商業学校の校長に、小笠原卓道校長の後任として就任し、5月県教育会長にも就任した。

昭和10年(1935)4月健康を害し病臥する。7月には母シノが逝去し心痛著しかった。夫人も病臥したという。それでも鷹巣まで母堂納骨に赴き、大張野に聖跡記念の行事に無理して出かけた。しかし11年1月9日遂に世を去った。享年65歳。12日に県教育会葬を以て送られ、8月鷹巣町浄運寺に埋葬された。函館師範卒業生有志が墓碑建立に協力した。偉大な教育者への敬仰が窺われる。

石川 理紀之助

弘化2年(1845)2月25日出羽国秋田郡小泉村に、奈良周喜治・とくの三男として生まれ、幼名力之助と名づけられた。名乗は貞直。生家は奈良喜兵衛家の分家である。祖父は喜一郎。曾祖父は喜左衛門で、母は中津又村伊藤八右衛門次女である。祖父は菅江真澄との交際もあったが、好学に過ぎ家運を傾けた。父母は勤労一途学問好きを排していた。だが5歳で祖父について手習を始めたので、幼時から日中は田圃を手伝い夜は学習をしていた。「喜一郎の^{どうらん}莫入」と呼ばれたという力之助は、祖父の句会の「寒さ」の題に「硯にも酒を飲ませる寒さかな」と吟じ、9歳では神谷市左衛門を師として習字を正式に行い、あまり能弁なので父に多弁を戒められ慚む。安政元年(1854)10歳から2年間高岡村奈良三治の寺子屋に入った。これが秀逸児の実際体験した基本学習だった。11歳で久保田に行った帰途菅江真澄の奥津城を詣でようと訊ねたら老人が雑草の中を指した。誰も知らなかったがその日が27年目の命日の7月19日であった(児玉庄太郎『偉人石川翁の事業と言行』昭和4・6・10平凡社)という。生涯30万首も詠んだという彼の、最初の歌が、この際の「なき人に慕う心や通ひけむおもはず今日の時に逢ふとは」であるという。思慕の縁の極まれりである。

好学でも軟弱ではなかった。12歳馬で叔母を久保田に送り馬に乗って一人で帰る時武家の子供達

に囲まれたが、怖じもせず振切って馬を一走りさせて平然と戻った。馬上も学問の場であり、5年に14歳で奈良喜兵衛に奉公する。久保田では僧蓮阿・吉川忠行・村井政直が三歌人であった。蓮阿は西善寺の僧で1首も自分の歌を書止めなかったという。訪問し会えずにいて万延元年16歳で再訪し「村蚊遣火」の題に「山本につづく庵の数ぞ知る暮るれば立てる蚊火の煙に」と詠み、名も問われずに入門。1年半で1万5000余首の添削を受け、初めて名を告げた。求めた歌書も彼の学習を好まぬ主人は燃やしてしまう。最年少乍ら力倆抜群の彼は20余人の監督に任じられ、土崎港までの用達しも多かったが、馬上でも歩行中も読書した。

主人も父も学問を喜ばず、彼は別の分家の娘タカエと恋仲だったのに、文久3年(1863)19歳で養子として主人の次女イシと縁組みさせられてしまう。実は、18歳時5両の賞与を与えられていたが、夜の学は許されず分家まで主家に居ることも不本意だと考え、この年書置きと5両とを残して無断旅に出た。懐中2朱(1両の1/4)ばかりだったので十文字・増田辺で旅の続行不能になる。出会った僧侶に川連村の豪商高橋利兵衛方を示唆され、訪問奉公すると共に同村野村住の女流歌人後藤逸女に就き歌作を錬磨し、歌人の経歴を充実した。

元治元年(1864)帰郷生家に復籍し、翌慶応元年山田村石川長十郎・ムラの養子になり石川家長女スワと結婚。慶長頃陸奥松山(今の岩手・福島にも地名はあるが宮城の志田郡か)から来住の初代大学以来山田を中心に下虻川・大久保・槻木など開墾、安東氏部将山田喜六の部下在地武士だった石川家は、佐竹時代も有力在地者だったが、11代源七以来衰退していた。家財政改善を目指し翌年数え23歳の彼は13名会員の山田村農業耕作会結成、7年計画を5年で目標達成。スワは志和ともあり養父は実父と昵懇だった。慶応3年(1867)長男民之助貞陰が誕生。翌4年(1868・明治元)戊辰ノ役に農兵徴集に応じ野隊教導となる。文武両道に秀いでいたのである。2年肝煎後見となる。

明治3年(1870)26歳。次男老(ろう・おい)之助貞風誕生、蓮阿入寂などがあった。5年28歳で秋田県の勸業部第二課畜牧係等外四等出仕として勤務秋田まで往復13里を歩いて通った。月給6円、

馬調役として農具（馬）税廃止の具申などをし、地租改正総代も務めた。翌年祖父喜一郎没。

9年12月清岡行三・飯沼長蔵ら同志と勸業義会を結成、翌年腐米改良意見を具申に上京し農商務次官品川弥二郎に評価され本省出仕を求められる。4月奈良の中村直三老農が11年10月まで来県農事試験場で米改良に当たっていたが、石川は次官に「中村月俸25円閣下は数百円」だが事務家と事業家の手当の均衡を計るべきだと述べ、拒否した。彼は20円だった由。この硬骨漢ぶりも確認しておくべきである。明治三老農の1人が中村で他に船津と奈良・林などが数えられた。彼も採種改良を研究『稲種得失辨』等は農科大学の参考にされた。

秋田にも室を借りていて客が訪ねたら老之助が押入で寝ていたということもあった。11年平沢の佐藤九十郎の意を用い種子交換会を結成、15年には「種苗交換会」に発展。この年5月仙北3郡に八木七等属・飯沼七等属ら勸農局官員を帯同腐米改良で出張、金澤西根村・角間川村・新成村を試験村に指定した。腐米が一般化したのは地主制も一因ではないかと思う。13年(1880)数えて36歳七等属になる。6月催主として歴観農話連を設立する。立候補制ではない県会議員に当選したが即時辞退。14年明治天皇巡幸に当たり「鶴の出羽の貢き久敷も御幸そけふのはしめなりける」と詠み献上した。15年(1882)38歳官を辞し、翌年次男老之助を石川岩之丞家に養子として出した。これは長男に家督としての自覚を持たせる為であろう。

15歳ぐらいの長男民之助は中島宅左衛門の寺子屋に入り武芸一般を習うが、全国武者修行の夢を持つようになった。農村興起を第一とする彼は役所も止め13青年で始めた山田村有志の活動結果を全村に及ぼすべく17年25戸の部落調査を完成した中で、20年(1887)「百姓は百姓の道を」と長男を諭すが、長男は反発、10月12日の夜家出をする。21年の6月には長男の徴兵検査と決まったので、4月2日自ら息子探しの旅に出た。鉾山を探し回ったうえで青森港から昨年10月19日函館に渡り更に国後島に向かったと判明した。

苦勞して島に尋ねると2月17日に腸チフスで悲惨な最期を遂げていた。著述『夢のあと』(明治22)に詳しいが「さして行く蝦夷が千島は遠けれ

ど子に逢はん日ぞ近づきにける」「日の本の国の果てまで尋ね行く親の心を思ひやらなん」と到着し「なさけなき人のしわざを見てしより涙も出でずなりにけるかな」と詠む落差は、涙なしには読めない。千島から遺骨を抱き帰って、次男を復籍この18歳の若者に家督を譲った。悲い哉である。

農商務大臣井上馨の内命で夫婦上京し農商務省で講話し、前田正名知事の招請で山梨にも行き、さらに千葉にも赴き講話した。山田村経済会・教訓十四条・などを話した(農商工公報46号)。「寝て居て人を起す事勿れ」「僥倖の利益は永久の宝に非ず」などの教訓は広く知られる。本宅を出た彼は3間×5間の廃物利用庵に暮らし山田村負債も全部償還し、9月に20町余奥で養父開墾の9反歩の瘦田のみの草木谷に2間×3間の小屋を造り、農業経営に当たった。槻木の小野崎弘巡查が1年半後の23年春突如免職になって訪ね来た。家族6人の爲に小屋を譲り、自分は9尺四方の小屋を造り移った。営々と働き小野崎家も自立した。石川自身は大いに業績を挙げた。23年養父と実母が没した。25年には実父も世を去った。しかし27年数えて50歳で長孫太郎(郎)が生まれる慶びもあった。

27年(1894)には大日本農会紅白綬有功章を受け、日清戦争で大本営の置かれた広島で天機奉伺の爲12月13日質素な行在所を拝し、整った国際性ある軍令部長官舎の応接室で樺山中将に会った。大日本農会会頭北白川宮の委嘱辞令で九州巡回の途に就くべく15日広島を発って森川・中島・佐藤3精農と共に各県で70余回の講演で1万5000余の人々に語り、翌年5月10日帰秋した。講話に精出し、南秋田郡農会設立、県農会設立両者会長となり、四国・千葉も巡講した。29年著名な耕地適産調を開始した。収集し古銭を泥棒して放火した奴が居り、31年5月23日草木谷の居所が全焼。日誌数十巻・詠草数十巻・執筆稿・蔵書2000余巻・著述70余篇・気候録20余巻等が灰燼に帰した。34年数え57歳で緑綬褒章受章。

明治35年(1902)前田正名の要請で森川源三郎・佐藤政治・伊藤甚一・田中源治・佐藤市太郎・伊藤与助・伊藤永助と4月から11月まで宮崎県北諸郡山田村谷頭の農村経済指導に当たって、帰途各地で講話をした。「適産調」731冊も完成した。谷

頭は現在の山田町と都城市にまたがる。

明治36年（1903）9月4日嗣子老之助が34歳で死去した。その妻いそは真坂村渡部氏の出で2人の間には3男1女があった。老之助も5万首を詠んだという歌人で前年正月勅題「新年の梅」に「うれしくも年の始めに梅さきぬ瓶にやさゝんかざしにやせん」が入選したばかりであった。

明治41年（1908）東宮の秋田行啓があり、令旨と菓子賜わる。秋田で東北歌道大会があり高崎正風が来会した。43年4月15日山田村八幡神社に秋田の仏師山川倉治作の「石川大人翁木像」が合祀されることもあった。森知事が米穀検査所を設置し66歳の彼は米穀検査部長になる。

明治45年（1912）仙北郡強首村九升田に6月28・29日秦豊助知事・小林定脩郡長らと出張、明治10年代20年代から衰微荒廃してきた村落の復興に努力する。7月30日大正元年に変わるがその8月1日篤農者達と出かけ、5日から救済事業に着手。全借財3万円の、真澄の賄・酒代関係文書を伝えると聞くこの村落で68歳の彼自らが午前3時起床を率先実行から始め3年間の実践指導を推進した。実績から知事の求めで大正2年には宮城、同3年には青森・岩手・宮城・福島各県で講話を行った。日本の老農石川翁が、地元秋田と近隣東北で救農の教示を展開した。この年9月18日スワ夫人が病で歿した。その中でも『農聖』と尊称される努力は続く、角間川町木内・布晒の救済に、夫人没後33日目から着手したのである。木内は上35中8下10、布晒は15の計68戸の村である。

大正4年（1915）8月5日満3年で九升田救済事業は復興終了式を迎えたが、腰痛を病むようになっていた。耐えて途中秋田市で県公会堂における悲憤慷慨の講話を、布団にもたれて脇息に寄りかかり敢行、帰宅後も病床で孫や協力者に指示し諸事処理した。8月19日九升田の事務処理完結の、30日本内の事務所整理（後事は小野岡義民に引継）の報告を聞き、9月6日重篤の病床から坂本三郎知事に四カ条の献言を呈し、翌日知事が「其心千古声」と大書した受納の辞を直接読み見せ、8日逝去した。享年71で翌々10日山田村落の丘に埋葬された。実践の農聖は従七位に叙せられた。

物部 長穂

明治21年（1888）7月19日仙北郡荒川村の名社唐松神社の社司長元の次男として誕生。母寿女はこの古社の59代目の社家である長之の長女。明治28年に60代目の社司になった父長元は、久保田藩士西野信一郎の弟であった。激しい廃仏毀釈の風潮の止まぬ同9年に結婚し名社家の嗣子となったわけであるから、神道家としての意気と至情に燃えて神道理論と実践を身に付けた人であろう。終生獣肉のみでなく鳥や魚も食さず、米飯さえ採らなかった（川村公一『物部長穂』）という。だから大正期3万5000戸もの講中を持つ大信者群「八日講」の崇敬を集めたのであろう。次男であっても長穂も厳しい庭訓の中で成長したに違いない。

明治27年逆合（淀）川大洪水、29年陸羽地震などを幼少時体験したことはその人となりに影響したかもしれない。秀才少年は34年（1901）3月朝日小学校を卒業し、秋田県第一中学校から改称された秋田県立秋田中学校に、兄長久の後に続いて進学する。それから深夜から翌朝まで勉強するので、彼の机に向かっている姿など誰も見た者がいないという有様であった。勿論上記の本で川村氏が、「物部家の血筋は、もとより生来の素質の良さによるものであった」と記す本具的能力はその通りであろう。従来36年に中学卒業とされて来たようであるが、そうではなく、明治38年に4年から所謂「四修」で第二高等学校に入学した。秋中の親しい級友に3年で退学した石井漠がいた。

明治41年（1908）二高を卒業して7月東京帝国大学工科大学に入学した。『唐松会通信第2号』という得難い資料を読む機会があったが、お弟子さんである人々の話や文章なので、偉くなってからの「先生」を語っているのであるが、学生時代の情報は全くという程語られていなかった。きっと素晴らしい学生だったのだと思う。44年土木工学科を首席で卒業し恩賜の銀時計を受けた。卒業論文は「信濃川鉄橋計画」であった。そして実際に鉄道院技手となって信濃川鉄道橋の設計に当たるのである。昨今道路公団問題がらみで、道路族とか言われる中の南国選挙区出の老練な代議士が「学者など理屈だけで、自分達が50年もやって来た道路建設の実際を何も知らない」と胸を張るの

をテレビで見た。そういえば石川翁に関しての『農聖石川理紀之助の生涯』（批評社・1999年）の「あとがき」で、著者田中紀子氏は「理紀之助が多数決を嫌い、政治家、役人、学者、弁護士を疎んじたのは故なきことではない。民主主義は多数決でことを決しようとするが、その前に自ら実践して事の本質を見極めようとはしない。……政治家、役人、学者は、彼らは、実際を知ろうともしないで、頭で考えたことを現実には当てはめようとする。政治家は人心を腐敗させ、役人は実際上のこともわからず、威張り散らし、村や町や地域や国に対する信頼を喪失させる」と書いている。

こうなると学者を非難する老練政治家も学者と一つ穴のむじな然とした同類になるが、それは兎も角として、学者がすべて実際面に無頓着で、頭で考えた抽象論や空理を推し進めようとしているとばかりは言えないと考えるが、物部技手は正しく学理と現実を一致させて止まない学者であった。

44年12月尾崎盛茂男爵の末娘元子と結婚する。男爵は通称三良で、仁和寺坊官の長男に生まれ幕末は尊王攘夷派に属したが、英国に留学し井上毅と近代法の制定に当たった。貴族院の勅選議員で法制局長官や宮中顧問官を歴任した官僚政治家である。平成6年12月25日付の先に触れた『唐松会通信第2号』の、娘（母方の尾崎家を継いだ）尾崎美穂子「父母を語る」という談話で「母は東京麻布・材木町で十二人の子供の末娘として生まれました。元日生まれなので、『元子』と名付けられたそうです。この屋敷は宮内省から下賜され三千坪もありました。広い屋敷の中には警察署があり、電車も通っておりました。結婚後材木町に住み、麻布・龍土町、六本木と移り昭和七～八年頃池袋に移りました。この家は父が耐震設計したもので、秋田から長照叔父さんが大工さんを連れて来て建てました。『地震があっても大丈夫』ということでしたが、震災で消失してしまいました」といっている。長穂も11人の兄弟姉妹であった。なお長穂と元子との間には2男3女が儲けられる。

大正元年(1912)内務省土木局技師となり、第一技術課で河川改修の任務に就くのである。この後東京帝国大学理科大学に再入学し理学士になったという年譜もあるが、『唐松会通信第2号』の

「物部長穂の足跡」の項に依ると「引き続き東京帝国大学理科大学で理論物理学を聴講する」とある。明治44年に大学を卒業し翌大正元年に内務省勤務となりその一方で「引き続き」という趣旨であり、これが妥当な伝えなのではあるまいかと思われる。大正3年に東京帝国大学助手を兼ねた。これも「助教授兼任」とした本もあるが、大学の資料によれば助手の方が記録されているという。

大正7年(1918)洋行をする。いうまでもなく調査研究の旅で、独乙・仏蘭西・英吉利・亜米利加を巡り、高層建築、橋梁、堤防、河川工事（治水）などを対象に知見を深めた。『秋田の先覚』5（長山幹丸「物部長穂」）によると倫敦のテムス川や下水道に特に意を注いだという。この文章には、視察から戻った同9年のこととして

同年いままでの研究調査の資料を整理し論文を提出、工学博士の学位を得た。論文は「構造物の振動並に耐震性について」と題するもので、
（一）、載荷せざる塔状構造物の振動並に耐震性について、（二）、載荷せる構造物、（三）、橋梁の振動並にその衝撃作用、（四）、吊橋の振動並にその衝撃作用という四章六十三節からなるものであり、構造工学に貢献するもの多大なりと認められたためである。

工学博士の学位は、旧学位令によるもので、当時十二名の工学博士がいたが、卒業年次明治四十年代で学位を得たものは長穂一人であり、三十二歳の若さであった。翌十年からは新学位令によって博士が急増している。つまり長穂は最年少の旧学位保持者であった。と記している。執筆者は地元の人なので正確な内容であると考えられる。

本稿は其の時代に行われていた数え年で記録しているので33歳で博士になる。5年前本県2人目の工博で5歳年長の鳥潟右一電気試験所長（当時）がいるから同年齢受位になる。大正11年(1920)11月7日工科大学が8年4月から改められていた東京帝国大学工学部講師を兼ねた。彼こそ「実践して」いる学者の典型である。先の洪水や陸羽地震の体験に加えて大正3年の強首地震のこともきつと講義の素材になっていたことであろう。

生きた素材が加えられる。12年9月1日の関東

大震災である。彼は数多くの貴重写真を取り学術的に入念有用な被害調査書を作成した。『物部長穂』で能代出身の著者川村氏は建設省官吏の専門家の目で「余震がまだ続き、火災の煙でむせかえり、瓦礫が山のようにある中、何かにとりつかれたかのような眼をいきいきと輝かした長穂の姿が被災地の中にあつた。……流言蜚語で市中は騒然とし、身の危険さえあつた。そんな危険もかえりみず、綿密で科学的な被害調査や膨大な数の写真撮影におわれる毎日であつた」と書く。同14年(1925)3月12日学士院恩賜賞を授与される。

大正13年、震災の実地で得た知見による「構造物の振動殊に其耐震性の研究」という従来理論を大きく修正した論文が、学士院で評価された。院長は宇和島出身の英法学者穂積陳重博士であつた。因みに言えば博士の弟は天皇機関説を排した独法の八束博士、長子は民法の重遠博士である。3人共に勅選貴族議員でもある。「地震学上先人未踏」(『日本学士院八十年史』)と評価されたのに、本人は「あんな論文が恩賜賞をうけるとは思つてもみませんでした。内務省土木課では河川の改修の仕事の本業としていますので、十分な研究もできず、公務の余暇や土曜、日曜を利用してやってみました」と謙虚に語つたと川村著『物部長穂』にはある。博士のこの底力というものは窺い切れない感じがする。この14年には「貯水用重力堰堤の特性並に其の合理的設計方法」なる多目的ダムについての土工学に関わる論文も発表された。現在まで沢山の多目的ダムが活用されている。この古典的論文の持つ意義は大きく広い。

翌大正15年(1926)5月内務省土木試験所長(勅任)となる。試験所岩淵分室に水理試験所を設け、量水堰検定など水理実験を進めた。東大教授にもなる。39歳であつた。「河川工学」講座を担当し学生を「さん」づけで呼び、甘党でコーヒー好き、それに日に60~70本吸う喫煙家。「授業中煙草を吸つてもよい」と学生に言った由で、それだけは私などには全く思いもつかない。

昭和になり4年(1929)所長指揮下、7~11月の間水理試験所で「北上川転動堰模型実験」が行われた。我が国最初の水理実験だつたというから成果の意義は推して知るべしである。8年(1933)

46歳で『水理学』(岩波書店)を出版した。本屋は定価20円に算定という587頁の古典になる大著である。著者は高すぎると学生などが入手出来ないと反対、原稿引揚げという決裂寸前で調停があり、5円50銭になつた。博士の人柄が偲ばれる。二大名著とされる『土木耐震学』(常磐書房)も同年公刊され、池袋の邸宅も落成した。先の長女美穂子の「父母を語る」には次のような表現がある。

父は「自分の好きなことは一番を目ざせ」という信念を持っておりました。……厳しくてこわい父でありましたが、大声をあげることはなく、私達に注意する時は、常に母を通して……父は酒に弱く、長雷(四男)叔父さんや長祝(七男)叔父さん達と飲むと、おチョコ一杯でまっ赤になる……趣味はテニスで池袋の自宅のテニスコートに、役所関係の人達を招いてプレーしており……また和歌を創ることに熱心で、扇子に細い筆で書いておりました。特技は細かい文字を書く……動物が大好きで、家には犬、猫、ウサギ、ヤギ、コイ、金魚などを飼つており……屋敷が広いため、爺やは草取りに苦労しておりましたが、ヤギを放し飼いにし……楽になつたと喜ばれ……父が家にいる時は、ほとんど書齋に入って夜中の三時頃まで研究に没頭し……六時には起き

昭和9年(1934)9月こうした生活の中で痔手術の直後、父逝去で帰郷を強行し、帰京後も治癒せず、11年には結局東大教授退官し、11月7日内務省も退官する。内務省人事行詰まるとはいえ博士のような土木界の至宝が第一線を退くのは残念と「土木ニュース」に書かれたほど若すぎる退官である。もちろんダム建設顧問、学術委員会委員長等に就任し斯界に尽くした。一方私的には藤村、晶子、白秋、啄木などを愛し万葉に親しみ、私撰百人一首を編んだりしていた。

昭和16年(1941)9月9日「一粒の米に『いろは四十八文字』を書いていましたが、最後の『ん』を書く前に亡くなりました」と長女が語る逝去を迎えた。享年54歳。終戦時帝都防衛の司令官物部長銚中将は弟で三男、五男長照が、61代長兄長久28歳で逝去の後62代を継ぐ。平成6年(1994)4月27日郷里に『物部長穂記念館』と銅像が建つた。

井口 阿くり

明治3年(1870)11月22日久保田城下亀ノ丁上丁に井口礼ミエの次女(第4子)として誕生、アグリと命名。井口家は佐竹義宣の時代から湯沢に住み、参観交替の宿であった。礼は天保14年(1843)に生まれ、20歳の文久3年(1863)に16歳のミエと結婚し、第1子第2子の娘2人は幼くて死去、慶應3年(1867)生まれの第3子である姉アグに次いで彼女は生まれた。親がアグにこだわり彼女をアグリとした。この名は女の子はこれで済ませ次には男の子を授かりたいという願望の表れだという。姉の名は止水(とみ)に改められた。

父礼は幕末維新期の著名人士で、安政4年(1857)藩校に入学し漢学を学んだが、時代趨勢の中で本居宣長や平田篤胤の著述も読むようになり、次第に国学に傾倒して行く。学は和漢を兼ねることになる。戊辰ノ役で7月3日副総督の沢為量に呼ばれた小野崎通亮が病気のため代わって会うことになり、小野岡家老を通じ藩主に勤王の由利出陣を促し、一藩勤皇に導く役割を果たすことになる。維新政局では明治2年皇学所に入り、さらに神仏混淆仕方参観として神祇官に出仕した。中央政局の変化と神仏分離の思潮と現実を体験して12月に帰藩し、藩学校教授本学係になる。「本学」は日本本来の学の意味で国学のことである。

このような時期に誕生した彼女は好学の家庭の中で育ち、10年(1877)8歳で4月に田中町の児玉女学院に入学した。14年(1881)上等八級生で9月に東北御巡幸の明治天皇が、秋田女子師範学校臨幸に当り、手芸を天覧に供した。姉の止水は御前朗読を、直ぐ下の妹キヨは席書を、姉妹3人揃って天覧の榮に浴したことは、勤王一家の感激と歓喜になったに違いない。数えて12歳である。

のち女子師範学校に進学し、明治17年(1884)には7月女子師範学校中等師範科を卒業し、母校児玉女学院の先生になった。この学院は今の町三丁目に当たるから、彼女の家亀ノ丁の現在も「平田篤胤大人終焉の地」の碑の立つ辺りから、幼い日の通学の路をお姉ちゃま先生として通勤していたことになる。学校制度の整備過程ではお兄ちゃん先生はよくいたというが、少女教師は限られていたものと考えられる。生来才媛なのである。

明治19年(1886)「学校令」の発布により、3月に師範学校と女子師範学校とが合併されるが、その秋田県尋常師範学校に入学する。『秋田の先覚』2には「あくりと同級の親友、神岡町神宮寺、富樫つる子の『あくり追悼文』には」として

あくりさんなどは、三級にもなおその上があるならば、それにも入学すべき資格をタツプリの英才であるにもかかわらず、明治十九年五月に私どもの五級に飛び込んで来ました。遠大な目的を抱かれて、成功を急がぬ人物は、また格別のものにて、この人あるがためにわが級はにわかには異様の光彩を放ちました。万能の才器溢るばかりでございましたが、どちらかといえば、推理力よりは記憶力の発達した人でございました。その輝く記憶は、一度目に映じ、耳にはいったことは決して忘れることない状態は実に実に常鮮風介の私たちの遠く及ばないところでございました。

という文章を紹介している。この項の担当者は井口阿くり研究者として大著もある進藤孝三氏なので信憑性高い文章である。多分仮名遣いなど常用風にした以外は原文に忠実だと考えられるが、「常鮮風介」は明治期の用語なのかと思われるが寡聞にして初見である。物事にいつも新鮮初体験的に接し、見聞した知識も風解してしまうという意味だろうと独り合点をしているが誤断なのかもしれない。いずれにしても級友が見た才媛のすがたはよく受け止めることができる。

明治21年(1888)3月第二学年修了で県の特撰生試験に合格、「卒業をまたずに、二十一年の三月に、級友茂木ちゑ(のちの茂木謙之助陸軍少将の姉)と二人、無試験で東京お茶の水の女高師に入学が許可され、はるばる東都にのぼる」と上の引用部分に続いて『秋田の先覚』には述べられる。事実はその通りであろう。ただ制度史的に言えば、21年4月に「高等師範学校女子部」に入ったのである。女子高等師範学校の独立は同23年である。

高師女子部に入って7月の試験で彼女とチエは首席と次席の成績を占めたので、秋田から紫式部と清少納言が来たといわれた由である。福島からやっと汽車に乗る当時、言語や服装も洗練されず級友に秋田の田舎者と馬鹿にされており、二人で

頑張って良い成績を得てハイカラ級友の鼻をあかしたら何ほ面白いだろうと、在秋の友達に便していたという。努力の結果目標を達したわけである。しかも卒業までの4年間首席井口・二位茂木は変わらなかったという(『秋田の先覚』)。

チエは明治26年末阿くりの姉夫妻の媒酌で浅石軍医正と結婚した41年退役した夫は秋田に眼・耳鼻科で開院した。後年のことだがチエの弟謙之助は満州事変で派遣騎兵第四旅団司令官時代に、軍人精神の粹を示す逸話が昭和8年(1933)1月27日新聞紙上に伝えられた。1月19日母親が亡くなってその報を受けた茂木少将は「母上の逝去を悼む。本葬を待て。余は生還を期せず。死の凱旋の暁母子の柩を出すべし」と、25日午後返電して来たのである。何れにしても井口・茂木両女学生の好成績は、明治秋田女性の吐いた万丈の気である。

明治24年(1891)3月2日「アグリ」を「阿くり」と「願済字違訂正」をした彼女は、翌25年数えて23歳の3月24日女高師を卒業し、女子高等師範学校附属小学校訓導となった。給料は15円だった。26年3月末附属高等女学校助教諭で20円になり、30年(1897)3月末には25円になった。そして30年11月25日依願免官となった。

実は毛利高等女学校教頭を嘱託されたのである。籍は女高師にあったという。山口高女が経営難かで殿様公爵の運営に移ったものらしく、女高師に来た教師引抜役は井上馨侯爵だったという。「話してみると、秋田の同志井口紘の娘ではないか」(『秋田の先覚』)強引即決で25日付山口に赴任した。校長を頼まれたが受けなかった由で月俸35円の教頭となった。校長は元台湾総督の上山満之進県参事官で、質素・勤勉・清潔をモットーの校風を掲げ活躍した。やがて校長は毛利五郎男爵となる。32年30歳の5月文部大臣から教育学研究の為米国留学3カ年を命ぜられ年1800円支給。

8月9日横浜出帆、8月下旬シャトル・バンクーバーなどを経て9月中旬マサチューセッツ州ノーサンプトン着、10月1日スミス大学に入学。33年(1900)9月ボストン体操師範学校に入学、基礎医学や体操・舞踊等を学び、翌年メイン州サコ市開催夏季2ヶ月の体操研修に参加。35年(1902)5月31日体操師範学校を卒業、その学級の「級旗」

を受けた。成績は首位独占し人格識見技量のすべて抜群で149cm43kgの日本女性が米国で大活躍したのである。7月からケンブリッジのハーバード大学の夏期学校で2ヶ月体操科を受講、米国東部を巡回、11月5日ニューヨーク発。ロンドン・パリ・ベルリンを視察。36年2月4日に48日の船旅で神戸上陸、6日帰京した。数えて34歳である。

3月3日女子高等師範学校教授に任じられる。高等官八等年俸500円で、国語体育専修科主任としてスウェーデン体操の普及に当たった。瑞典人リングが発案した解剖学・生理学を基礎に置く均斉ある運動の体操で、この館話の段階で「企画展」を催しているやはり秋田県人斎藤由理男が、大正末から昭和にかけて普及の展開を行うデンマーク体操に先行する教育活動になる。父紘は秋田神社祠官の任にあったが、愛娘の帰朝に大きな誇りと喜びを感じたに違いない。だが酷な悲しみも訪れた。明治37年(1904)12月陸軍大学校在学中で出征していた長男井口正(まさし)中尉が二百三高地で戦死した。父は激嘆の故であろう翌月急逝した。阿くりも幾月も泣き続けたという。

明治42年(1909)40歳を数えた彼女は宮内省御用掛を拝命した。第八皇女富美宮允(のぶ)子内親王と第九皇女泰宮聰(とし)子内親王の体操遊戯の教育掛を勤め、朝香宮鳩彦王妃となる姉宮は婚礼までの19~20歳に亘り、東久邇宮稔彦王妃となる妹宮は14~16歳に亘り、44年7月までの名誉ある勤めであった。この7月15日京大出の法学士で33歳の佐賀県出身藤田積造と結婚し翌日渡米したため17日官職休職となり、18日宮内省も依願被免となる。彼女が級友富樫への談では、東大京大戦での立派なテニス選手を褒め新聞に報道され、本人が来て求婚され、東京の妹の処にも行って運動した。岩手の多田の姉も上京してすすめたので熟慮の上肉親の説に従い受諾したという。

岩手の姉とは多田政固夫人トミで、その娘セツが大山幸太郎夫人である。彼女の結婚記念写真に大山夫妻も写っている。藤田は桑港の古谷商会に就職したが病気で退職、2年ほどで帰国したらしい。大正3年(1914)末妹エイが博物館長の夫川上瀧弥と台湾に住むのを頼りに渡台、夫は台北銀行に勤務、彼女は頼まれスペイン人神父の静修女学

院創立に協力教頭になった。校長ケレメン神父の利欲主義経営で彼女は7年間苦勞する。既に2年に妹キヨも娘正子と渡台していたが、頼りの川上が4年死去し、エイとキヨは神戸に住み、5年キヨは東京に移っていった。そして9年には夫の病状悪化した阿くりが帰京することになる。

翌10年(1921)2月深川区明治小学校首席訓導になったが、渡英のため7月に辞任、三井物産欧州総監督瀬古家子女の家庭教師として9月倫敦に赴任。夫は8月精神分裂症を九州の実家で療養することになる。瀬古家の長女寿15歳、次女喜与14歳、三女美年7歳だった。寿は後の加瀬俊一夫人である。13年巴里オリンピック(三段跳び織田選手6位陸上日本初入賞)も観て、10月帰国小石川の妹宅に同居。竹早町9番地井口キヨ方藤田阿くり原籍佐賀県西松浦郡大川村と記録される。

大正14年(1925)女高師国語体操専修科4期生の教子茂木(関根)ゲン贈与の東京高等家政女学校を東京高等実習女学校と改め経営に没頭、「真に人類愛に目覚めた徹底的な社会奉仕的教育道に精進」と評価され昭和4年石井漠舞踊大会を報知講堂で催し義金を得、5年7月忠治夫人町田孝子後援会長に就任。校勢拡大し彼女の還暦祝が行われる中、夫積造は弟太一の家族とブラジルに渡る。

昭和6年(1931)3月26日、62歳の阿くりの学校に当年まで勤務、設立中の城東高等家政女学校校長になった松岡(旧姓根田)ぎんが、前々日の卒業式に繁忙で不参した弁明に訪れた。連立って3時過ぎ帰途に就き、本所亀沢町で自分の学園の幼稚園児の栄一に会い「栄ちゃん立派になさいよ」と言い、松岡校長にも話しかけた。急に「眼が回る」と倒れ、そばの床屋の人の手も借り、栄ちゃんの家玄関まで入れたが、こと切れたのである。松岡校長は明治6年生れで亀ノ丁出身、26年尋常師範学校卒業後本所高小勤務。42年夫と旅順に渡り大正14年夫死して帰国、阿くりの学校に勤めていたのである。28日の神式の校葬では神籬を町田農相夫人と田中文相夫人から贈られた。

齋藤 佳三

明治20年(1887)4月28日矢島町館町に忠一郎実秋ナヲの末子として誕生。本名佳蔵。4姉1兄が

いた。弟が2人生れ1人は早世、1人は分家したという。父は郵便局長で県議会議員も勤めた。母は金浦の井口家の出であった。26年(1893)矢島小学校に入学、土田誠一と同級になる。高等科には館合小学校から進学した小松耕輔がいた。佳蔵は祖母の理解もあり好んで絵を書いていたという。

3人は成人後上京してからも親交を続ける。土田家は平安時代からの修験の正系だった。誠一は秋田師範から進んで東大大学院で哲学を学び井上哲次郎門下だったという。大正8年には助教授になり、14年から昭和2年まで独・英・米に留学し倫理学を研究した。帰国後神宮皇學館教授にもなり、成蹊高等学校長になる。国保・直鎮・正顕兄弟の父親である。小松孝輔については『秋田県立博物館研究報告』第26号に記述済である。

明治33年(1900)県立第一中学校に入学する。翌年度から秋田県立秋田中学校になる。石井漠は一年下である。ピアノ独習をし音楽に開眼して行く。ところが教頭のスパルタ教育に反発した生徒たちがいわゆるストライキ事件を起こす。校長添田飛雄太郎は「いい者は何とかなる」といって、佳蔵も同級の木村謹治や漠やその同級奈良環之助やは退学処分になったという(『秋田の先覚』5)。上京した彼は神田に住む医師の叔父宇津木忠三郎宅から早稲田中学に通学した。翌37年順天堂中学に転校し卒業した明治38年(1905)東京音楽学校師範科に進学。39年には6月の「楽苑会」第1回公演に小松作曲の歌劇「羽衣」で主演をした。

明治40年(1907)数えて20歳で音楽学校を退学して東京美術学校図案科に入学した。小山内薫の妹である岡田三郎助夫人八千代のすすめに依る美校入学だったという。音楽学校一年上級だった山田耕作(耕箒になるのは昭和5年以降の由)や近衛秀麿そして勿論石井漠らと親交を持った。44年は音楽学校も美術学校も官立専門学校になる年であるが、この年に処女作曲「子守唄」を作った。この頃に佳蔵を佳三と称するようになった。

大正元年(1912)秋の卒業制作に「織物壁張図案」を発表。11月26歳の彼は伯林に渡り、山田耕作と同宿する。ベルリン王立美術院に学ぶなど独乙滞在のまま翌年3月卒業する。6月に「曼陀羅の華」を作詩している処に父の訃報が届いた。嘆

く彼に同情した山田は「音詩曼陀羅の華」を作曲した。2年12月末にモスクワ経由で帰国の途に就いた。シベリア鉄道で満州に着き3年1月大連から船で下関に上陸帰朝した。「日本意匠協会」を設立、また「表現派と立体派と未来派」(「美術新報」)を発表した。

大正3年12月1日歩兵第五聯隊に「一年志願兵」として入隊した。高学歴の人が就学などの理由で徴兵延期をされていて、学歴などの高さを前提にし通常より短期の現役生活をする制度である。彼は入隊時兵士の羅紗製軍服の着用を、「こんな板の如き軍服は欧州の文明国などにはない」といって拒否し、班長も中隊長も命令に服させることができず、遂に大隊長まで上げられ其処の説得でやっと着用したという。中学生のストライキとは異り帝国陸軍の兵士としての軍服拒否は、如何に軍縮気運の大正デモクラシー時代でも、稀有のことに違いない。第二次大戦下の学徒兵経験者としては信じられないほどの話である。それよりも信じられないようなことは、恋人の秋田の女学校の音楽教師松本クニから毎日のように恋文電報が来たという話である。予備士官学校の候補生時代、三親等までの女性しか文通は許されなかった者としては驚くばかりである。その中で最も気の合ったのは柔道三段の小玉確治兵士だったという。後の太平山社長であるから此の人も一年志願兵だったのであろう。二人で作詞し佳三が作曲して「吹雪」なる曲を作ったという。入隊数日後の12月6日帝劇で「曼陀羅の華」が初演された。4年11月30日に伍長に任官して除隊した。

大正5年(1916)3月に『新しい民謡』なる初の歌謡集を出版する。10月ローヤル館オペラ開場装置・衣装担当など意匠(デザイン)を実生活と結びつける多能ぶりを発揮する。何よりもこの年に松本クニ(久邇子・邦子)との結婚が特筆される。結婚式の衣装は彼のデザインであった。翌6年4月「ボッカチオ」の公演を最後にローヤル館を去った。店頭装飾や浴衣・半襟・傘などの模様に関する意匠まで活動範囲を広げる。大正8年装飾美術家協会の発足に参加、5月12日東京美術学校非常勤講師になり以後15年間服装学・意匠図案学を担当する。秋田県人の門下には舞台芸術の長瀬直

諒、商業美術の高橋良がいる。秋田魁新報詩壇選者もつとめた。

9年土田誠一作詞「矢島のうた」の作曲をし、矢島小学校校旗の図案を作る。松竹キネマの美術部長にもなる。10年には矢島小学校の奉安所の設計を行った。11年特許局から意匠法に関し、東京美術学校からは装飾美術教育に関し調査を求められ、農商務省嘱託として独乙・仏蘭西に出張、12月8日北野丸で横浜を出航する。欧州公演に出発の石井漠と同乗することになった。この春には佳三の紹介で従弟で映画狂ともいえる映画好きの斎藤寅次郎が松竹に入社した。日本の映画文化史上有意義でな事実ある。浅草のおでん屋二階に間借り浅草オペラのスター石井漠の新妻と住む室には、谷崎潤一郎・佐藤春夫・今東光・東郷青児などの文士が屯しており、同郷の友小松耕輔や久邇子夫人を伴った彼もいた。「邦子人形」という彼女をデザインの人形が評判だったというが、彼女本人も、貴婦人のような派手な振袖姿の美しさで人目を惹いたという。

渡欧した翌大正12年(1923)関東大震災のために2年の予定を切り上げて11月に帰国した。商業美術・商業デザインなどの語を提唱活躍する。夫人の店リリスの包装や「冷涼太平山」のレットルをデザインしたと記録されている。15年1月には照宮成子内親王のお生まれになったお祝いの、東京日々新聞主催「皇孫御誕生記念子供博覧会」について、全体装飾設計及び審査員を嘱託される。翌年彼らの提唱で帝展に第四部美術工芸が設けられ、翌々年彼の『食後のお茶の部屋』が入選した。

昭和4年(1929)歌舞伎座、帝国劇場などで背景や衣装を設計し、石神井に自邸、葉山に別荘を自らの設計で建てる。ビクター出版社「ビクターハーモニカ楽譜」の装訂担当を始めた。10月には帝展に「寛ろぎの食堂」を出品入選するなど多方面の活躍をするが、一番印象的なのは、9月に中華民国国立芸術院創立に当たって図案科主任教授に招聘されたことで、3年間大陸との間行ったり帰ったりすることになったことである。しかし残念なことに、具体的日時を確かめ得なかったが、この頃愛する夫人を病で失う悲しみがあつた。

昭和5年3月彼の曲「ふるさとの」を主題歌に

した溝口監督の映画「ふるさと」を日活が製作。9月には「芦原小唄」を作詞作曲する。10月には「日本間の寝所」が帝展に入選する。尚この年9月に「上海事変のため帰国」という年譜事項（「斎藤佳三年譜」）の記録があるが、史実に合致しない。この頃田中孝子と結ばれたとその年譜にも『秋田の先覚』5にもある。再婚したのであろう。

昭和6年(1931)彼の曲「踏み絵」を高田せい子が、同じく「ノスタルジヤ」を藤間静江が踊り、また彼の作曲「生命の叫び」が石井漠に踊り続けられる。帝展で「応接室」が入選美術学校に行幸の両陛下が使用されたという。尚「斎藤佳蔵（佳三）先生年譜」にはこの年9月に45歳の彼が、「上海事変のため帰国」とあるがこれも史実に合わない。これは「満州事変」であれば合致する。参考までに記せば、上海事変は昭和7年1月発端である。その7年には帝展に「音楽室の照明・ピアノを主とした室」が入選した。数え年46歳。

同9年(1934)秋田市産業工芸図案顧問となる。福岡県でも同様の指導を嘱託され、長崎市の博覧会の設計も委嘱された。郷里でも「太平山」「爛漫」「天寿」等のレットル図案を作った。9月には東京図案専門学院長になる。この学院が第二次世界大戦の戦災消失まで続く。12年(1937)11月2日には「斎藤佳三氏美術音楽生活25年記念会」が日比谷公会堂で催された。発起人は山田耕筰を代表に近衛秀麿・長田幹彦・西条八十・石井漠ら21名士であった。舞台装置や意匠図案は自ら率いる東京図案専門学院卒業生が当たった。当時この学院には留学生数十名がいたという。

14年3月商工省嘱託となった。既に前年厚生省の嘱託になっていた。11月には『国民服の考察』を発行した。国民精神総動員中央連盟・陸軍被服本廠内被服協会などの役員として儀礼章や国民服のデザインをする。15年東京服装美術学校長になったといい、皇后陛下宮中服考案に専念していたという。17年(1942)には5月に大日本婦人服協会常務理事となり、時局の中で貢献を続けた。しかし戦火は彼の東京図案専門学院も焼いてしまう。略歴資料では昭和22年5月25日付で赤坂区新町1-1の学院戦災のことを記載するが、理に於いて考えれば恐らく昭和20年(1945)のことであろう。

昭和21年から日本女子大学生生活芸術科講師になった。東筑紫学園短期大学の教授（講師ともある）にも就任したとある。日本名歌110曲が出版され彼の「ふるさとの」の曲も収められた。昭和27年「広川松五郎の歿後後任問題」と略歴に記される挿話がある。それは『秋田の先覚』5の、彼の講義を受けた長瀬直諒が述べるところによると、東京芸大の工芸部長だった文様史の大家、小場恒吉は、彼にとっては先輩にあたる。しかし、二人の性格は対照的で、どちらも膝を交えて話そうとしたことはなかった。

昭和二十八年頃のこと、東京芸大の図案科主任教授だった広川松五郎が死去したため、後任問題がおきた。小場は図案科の教官たちから相談を受けると、次の資格に適する人物がいいと返答した。一流デザイナーで教育の経験があり、外国語ができ外国事情に通じ、論争もできる見識ある人、しかも前任者と同年令ぐらいの人をと。これは斎藤佳三をおいて外に見当たらない。小場は肌の合わない彼を、仕事の面ではやはり高く買っていたのだ。

しかし、佳三は交渉をうけても煮えきらない返事をしていた。「斎藤らしくないな」小場は首をかしげた。実はこのときすでに佳三はガンに冒されていたのだ。

とある。小場は周知の秋田出身文様の大家である。

28年(1953)矢島小学校・矢島中学校の校歌を作詞作曲した。中学の制定式で講演をしたが、大正時代母校矢島小の校旗デザインの際は、燕尾服にシルクハットで「矢は直線のシンボルです。君たちも、この矢のごとく、理想にむかって直進したまえ」と語った（『秋田の先覚』）という。服装は異っていたろうが、後輩に呼びかける愛郷心は、この時も同じであったに違いない。

昭和29年(1954)7月晩年の執着「有鍵楽器の採光投射装置」の実用新案が登録された。登録番号は415872であった。30年11月に石井漠が見舞に来た。「会いたかった」と装置を説明し、半失明状態の漠もその装置で踊ってみたいといい、2人は意欲を見せ合った。5日後の11月17日世田谷区上北沢3丁目877の自宅で逝去。享年69であった。昭和44年矢島町八森城址に顕彰碑が建立される。